

研究発表 第二言語習得におけるスキャフォールディングの有効性 : 日本の英語教育の場合

| | |
|------|---|
| 著者 | ヴァンバーレン ルート |
| 著者別名 | ヴァンバーレン ルート |
| 内容記述 | 中央アジア諸国日本研究カンファレンス 日程 : 2017年2月18日-19日 会場 : カザフ国立大学東洋学部棟 (アルマティ、カザフスタン) |
| 雑誌名 | 中央アジア諸国日本研究カンファレンス論文集 |
| ページ | 27-31 |
| 発行年 | 2017-02 |
| URL | http://hdl.handle.net/2241/00146443 |

第二言語習得におけるスキヤフォールディングの有効性

—日本の英語教育の場合—

ヴァンバーレン ルート

筑波大学

要旨：本研究においては、第二言語習得におけるスキヤフォールディングの有効性を検証する。足場づくりともいわれるスキヤフォールディングは学習者が新しいスキルを身につける際、教員（もしくはすでにスキルを身につけているピア）が手助けや支援として与えるサポートのことである。そのとき、支援者は常に学習者がすでに一人でできることとまだできないことを把握する必要があり、両領域の間に位置する最近接発達領域（心理学者ヴィゴツキーが提唱した概念）において必要最低限のサポートのみ与えることによって学習者の学習意欲を促すことができるとされている。

本稿では、英語でのライティング経験が少ない日本人大学生を対象とした研究の成果を報告する。1学期（15週、週1回90分授業）間に亘り、教室内活動の一部として英語での段落の書き方に取り組み、その上達を主にライティング課題の単語数増減の観点から考察し、教員が与えるスキヤフォールディングの有効性について記述する。教員が段階的に導入した段落の書き方や使用した視覚教材、学習者がライティングに対して感じる負担を減らすための工夫、フィードバックなどを説明したうえ、日本人大学生177人が授業中に行った839のライティング課題を分析した結果、有効だったサポートとそうでないものを明らかにする。

単語数の増減に影響を及ぼしたのは、視覚教材の有無およびライティング課題のテーマが学習者の生活に関連しているか否かの2つだった。また、難易度の高いテーマの場合、時間制限内に書かれる単語数が減り、段落の構造も崩れることが明確となり、ライティング前の語彙導入および学習の有効性や段落の構造のさらなる定着のための工夫が今後の課題として挙げられる。さらに、段落の構造の定着を上げるために、視覚教材の有無、教員によるフィードバックおよび配布資料が有効だと考えられるが、詳細な分析が今後必要であると思われる。

Abstract: The current research discusses the effectiveness of scaffolding in SLA. Scaffolding can be defined as the support given by an instructor or peer who already has certain skills to a learner trying to acquire new skills. The supporter always needs to be aware of what the learner can already do on his/her own and what not. In order to encourage the learner's motivation, only a limited amount of support should be given to the learner in the Zone of Proximal Development, introduced by Lev Vygotsky and situated between the zones of what the learner can do or not do alone.

The research target of this study is a group of Japanese university students with limited experience in English writing. During one semester, they worked on paragraph writing as part of in-class activities. Their improvement is mainly considered in terms of word count per writing. First, the effectiveness of the scaffolding provided by the instructor will be described. The paragraph writing process introduced in steps, the visual materials used, the methods to lower the burden for the learner felt towards writing, as well as the use of feedback are explained. Next, 839 ten-minute

timed writings by 177 Japanese university students are analyzed to determine what support was effective.

The results indicate that the presence of visual materials and topics close to the learner's life were effective to increase the word count per writing. Topics with a high difficulty lead to a word count decrease and a paragraph structure collapse. Accordingly, further research is needed on the effectiveness of vocabulary introduction before writing. Preliminary results indicated paragraph structure correctness is affected by the presence of visual materials, instructor feedback and class handouts. However, in future research, more detailed analysis is needed to support this claim.

0. はじめに

英語でライティング経験が少ない大学生に、段落のような文の塊の書き方を身につけてもらうことを英語科目の目的の1つとする際、どのように効果的に授業を進めることができるかを考えると、まず学習者が一人でできることとできないことを見極める必要がある。一人でできるスキル既発達領域から少しずつスキル発達可能領域へとステップアップできるようにスキヤフオールディングを利用して授業計画を立てることが重要である。その計画立案において、ヴィゴツキーが提唱したスキル既発達領域とスキル発達可能領域の間に位置する最近接発達領域を重視し、そこでの教員もしくはスキル既発達したピアによる、学習者に対する必要最低限のサポートと学習意欲の向上促進が重要である。

本稿では、日本人大学生が英語での段落の書き方を学習する過程におけるスキヤフオールディングの有効性を検証するために、授業内に使用されたスキヤフオールディング方法の実例を説明し、主にライティング課題の単語数増減に注目してその有効性を明らかにする。

1. サンプルとデータ分析方法

1学期15週の4技能育成を目的とする英語コミュニケーション科目の初回授業参加者230人中、215人が履修登録した。そのうち、授業内に合計5つのライティング課題中4~5をこなした177人(100%)を研究対象とし、2グループ(5つの課題をこなした131人(655、74%)と4つの課題をこなした46人(184、26%)(合計839))に分けて分析を行った。3つ以内の課題をこなした受講者38人が十分に学習できていないと考え、サンプルから除外された。

教員1名が1週間おきに課された課題にフィードバックを書き、スコアを付けた。受講者に返却する前に課題がスキャンされ、手作業で単語が数えられ、スコアとともにExcelに入力された。

2. 授業内活動：5つのスキヤフオールディング方法

使用したスキヤフオールディング方法が5つである。単独に使用されたものもあるが、スキヤフオールディングの意味通り、段階的に使用されたものがほとんどである。

2.1. ライティングに至るまでのスキヤフオールディング

学習者のライティングスキルを見極めるためにはまずスピーキング課題が課された。受講者がペアでインタビューを行い、質問に対して必ず追加情報を加え、互いの情報を箇条書きでまとめた。ペアインタビューはその後導入される「談話」活動への第1歩でもあった。次に、10の文で相手を紹介するライティング課題が課された。多くの受講者が「各文に通し番号・各文に改行・

文と文の間に訂正用の空行」という中学校や高等学校のやり方を選んだ。段落を書いたことがない受講者がほとんどだと明確になった。

2.2. 段落の書き方の指導および練習

前節の結果を踏まえ、学習者は彼らが使用した通し番号や改行が新聞や小説、教科書などとの比較により不自然であると、授業内のディスカッションで気づき、不足している項目として接続詞や文の塊などを挙げた後、段落の構造や書き方が 5 段階で導入された。その段階は Zemach and Rumisek (2003)などにも広く紹介されている「1. テーマを決めること・2. ブレインストーミングとマッピング・3. アイディアの編集とテーマを絞ること・4. 一般的な段落の構造の学習・5. 段階 1~3 を踏まえて段落を書く」である。

個人で段落を書く前に学習者が、ペアで練習用の段落を読み、構造を把握するために文を機能別（例：説明文や例文、結論など）に色分けした後、3・4人の小グループで段階 1~3 を踏まえながら段落を書いた。上記の過程を経てから、学習者がはじめて個人で段落を書くことに挑み、宿題として電子ファイルで提出することとなった。

2.3. 「談話と発表」および「談話とライティング」との交代

10 週間に亘り、教員が 2 週を 1 セットで、5 セットのテーマを与えた。セットの第 1 週に学習者がペアでテーマについて話し合ったのち、短く発表した。第 2 週に類似したテーマを用いて話し合ったのち、時間制限 10 分以内にライティング課題をこなした。2 週を 1 セットで類似したテーマを扱うことには 2 つの理由があった。ライティング経験が少ない学習者が突如段落を書かないといけない場合、負担が多く壁が高い。しかし、類似したテーマに慣れることによって壁が低くなり、より楽に書けるようになる。もう 1 つの理由はライティングを負担と感じる学習者が多く、話すことと書くことを交替に行うことによって感じる負担が軽減されるからである。

一人でできる既発達領域でも各学習者はスキルが異なるため、常にノート・配布資料・辞書が利用可能で、これらはスキャフォールディングの一部であり、課題に感じる負担を和らげる機能も持つ。

2.4. スキャフォールディング型課題および教材

2 週連続で類似したテーマについて繰り返して話し合う活動ことによって、テーマに関するアイデアや語彙、文の構造や言い回しなどが身につくようになり、学習者がより流暢になり、それが時間制限内に書ける単語数増へとつながる狙いがある。紙面の都合上、テーマの詳細などは割愛する。

教材の例として、視覚教材のスライドが挙げられる。教員が書いた段落がスクリーンに映され、スピーキング（アイデアや語彙等）とライティング（段落の構造等）のサポートとして使用された。段落の書き方を指導した際「文の機能別色分け」が初期のスライドに使用されたが、学期が続くとともに足場を外す意図で色分けなしのスライドへと変化した。

2.5. 随時に継続的なフィードバック

全てのライティング課題に、教員が個別に段落の構造や文法、意味などについて手書きでコメ

ントを追加した。さらに、課題を返却するとき、授業内で共通する問題点を口頭で取り上げた。最初のうち、フィードバックが形（タイトル、インデント、改行しないこと）に注目し、徐々に内容（主題文、例文、説明文、結論）へ移行した。そして注意点への認識を高めるためにそれらを学習者に繰り返してもらってからライティングを開始させた。

3. 結果および考察

表 1 はグループ別および課題別の数を示し、図 1 は各ライティング課題の単語数を示す。

表 1. グループ別各課題の数

| | 課題 1 | 課題 2 | 課題 3 | 課題 4 | 課題 5 | 合計 |
|---------------|------|------|------|------|------|-----|
| 5つの課題を完成した受講者 | 131 | 131 | 131 | 131 | 131 | 655 |
| 4つの課題を完成した受講者 | 38 | 39 | 34 | 33 | 40 | 184 |
| 合計 | 169 | 170 | 165 | 164 | 171 | 839 |

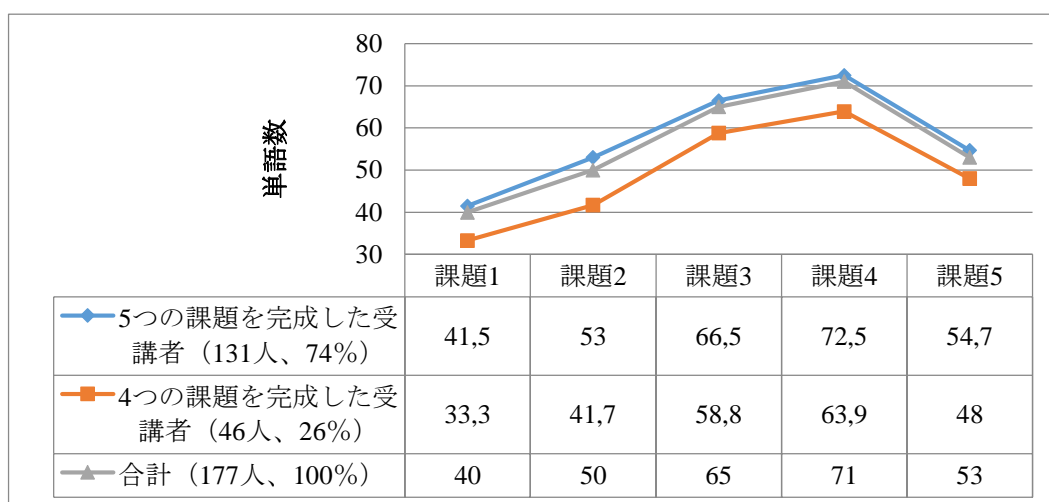


図 1. グループ別および課題別での学習者が使用した平均単語数

2 グループとも学習曲線が類似しているが、全て（5つ）のライティングをこなした受講者は平均単語数が最も高く、4つの課題をこなしたグループより7単語以上多く書いている。

宿題として電子ファイルで提出された受講者個人の段落は形も内容も大きな問題がなかったため、そして教員執筆の段落例によって受ける影響を避けるために課題 1 では、視覚教材が使用されず、最近接発達領域においてサポートとして類似したテーマ・ノート・配布資料・辞書が充分だと思われた。しかし、単語数が少ない結果となり、サポートが不足したと判断せざるを得なかった。セット 2 から視覚教材でサポートを補った結果、徐々に単語数が増量した。増量のもう1つの要因は学習者の生活に関連したテーマの使用だった。それは、著しい減少がみられた課題 5 の結果から明確となった。教員は随時にフィードバックを行ったように、スキャフォールディングの必要性を常に見極め、サポートを与えるか否かをその都度判断した。単語数も形も安定して

きた 4 セットでは視覚教材の単純化により少しずつ足場を外しても単語数への悪影響はなかったが、セット 5 では、外しすぎてしまったと考える。セット 5 は類似したテーマだったが、それまでのテーマより難易度が高かった。それを補うためには宿題としてセット 5 のテーマに関する内容や語彙を調べる課題が課されたうえ、視覚教材の代わりに口頭の例が述べられたが、予測していたより学習者のスキル未発達領域であるスキル発達可能領域に入ってしまう、その結果単語数が減少した。要するに、スキヤフオールディングの必要性、換言すれば、最近接発達領域とスキル発達可能領域の境界線を見極めることが困難であり、課題 5 ではある意味で見極めの不成功例である。

4. 結論

本稿は、ライティング経験が少ない学習者の段落を書くスキルを発展させるために、どのようなスキヤフオールディングが有効であるかについて、177 人のライティングデータを基に記述した。単語数の増減に関しては視覚教材の有無や学習者の生活に関連テーマの有無が影響を与えることが明確となった。

今後の課題として、段落の構造を定着させるために有効なスキヤフオールディング方法の分析が挙げられる。

参考文献

- ヴィゴツキーL.S. (土井 捷三・神谷 栄司 訳) (2003) 『「発達の最近接領域」の理論—教授・学習過程における子どもの発達』三学出版
- Zemach, Dorothy E. & Rumisek, Lisa A. (2003) *Success with College Writing: From Paragraph to Essay*. Macmillan Language House